

おとさだ
乙 貞

第254号 通巻44第3号
令和6（2024）年8月1日発行

守山市立埋蔵文化財センター
〒524-0212 守山市服部町2250番地

TEL&Fax 077（585）4397
Mail maizobunkazai@city.moriyama.lg.jp

夏空が広がり、容赦なく太陽光が照りつける過酷な毎日が続いていますが、梅雨最中の7月には、20年ぶりに千円、五千円、一万円紙幣が刷新されました。新紙幣には、近代の経済、教育、医学各界に功績を残した渋沢栄一、津田梅子、北里柴三郎の肖像が採択され、新たにそれぞれのお札の顔になっていくわけですが、偽札防止のために3Dホログラムなど、最先端技術の粋が導入されていて、造幣の進歩を感じます。

さて、紙幣の歴史は案外と浅く、全国通用紙幣としては明治維新、1868年の太政官札が初現となり、銭貨、コインがそれまでの長い貨幣経済を担ってきました。流通貨幣としては、708年に唐に倣った和同開珎に始まり、その後、皇朝十二銭が铸造されましたが、目論見どおりにはことが運ばず、平安時代前期の乾元大宝をもって頓挫しています。再び貨幣が復活するのは、およそ640年後の江戸時代、大判小判の金銀貨、銅貨の寛永通宝を待たなければなりません。

銭貨廃止後は米や絹布を物品貨幣としており、中世以降は中国からの渡来銭が地域通貨として流通し、貨幣経済拡大のモメンタムを支えていました。時の政府に頼らずに、為替レートも何もない中で貨幣経済を発展させていった中近世の民衆もまた、新紙幣の肖像に値するのではと想起しました。

それでは、発掘調査の動静と6～7月に実施したイベント情報をお伝えしていきます。

発掘調査だより

吉身西遺跡第136次調査

今回の調査は共同住宅建築に先立ち、4月25日から6月7日まで実施しました。今回の調査地の所在は下之郷3丁目字下鎌田で、開発地約1,500㎡のうち270㎡を発掘調査した結果、竪穴建物2棟（SH-1、2）、溝3条（SD-1～3）の他、土坑、ピットを検出しました。ここでは、主な検出遺構として、竪穴建物SH-1、2と溝SD-1～3の概要を報告します。



吉身西遺跡第136次調査全景写真

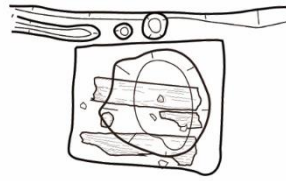
SH-1は南西側に広がりを見せ、後世の溝SD-1、2の重複を受けているため全容を調査できませんでしたが、一辺約5.8mを測る方形の建物で、北東側の支柱穴2穴と床面からは東南辺中位で貯蔵穴（SK-2）、検出状況から四周すると考えられる周壁溝を検出しました。

もう1棟のSH-2は、調査地北辺近くで検出したもので、SH-1と同方位を向く一辺約5.5mの方形

プランの建物です。床面からは4支柱穴の他、中央で炉跡(SK-②)、東南辺中位から貯蔵穴と考えられる土坑(SK-①)、四周する周壁溝が見つっています。

この建物の貯蔵穴SK-①は80×95cmの方形で、掘削を進めると、深さ5cmで板材を検出しました。板材下は直径約65cmの円形状となり、約30cmの深さで底が露呈しました。つまり、SK-①は2段からなる貯蔵穴で、その中段で検出した板材は貯蔵穴の蓋として使用されたのではないかと考えられます。このSH-1、2は、床面出土の土師器から古墳時代前期の時期がうかがえます。

3条検出した溝のうち、SD-1は幅1～1.4m、深さ約30cmの溝で南西-北東方向に伸び、竪穴建物SH-1と溝SD-2を重



SH-2・SK-①出土実測図(左) 検出写真

複しています。ここからは8世紀前半の須恵器坏身が出土しています。SD-2は幅約40～60cm、深さ20cmの溝で、おおむね東西方向に伸び、SD-1に重複を受ける一方で、SH-1を重複しています。SH-2に重複を受けるSD-3は南北方向に伸びる溝で、幅1.5～2m、深さ40～50cmの規模を測ります。

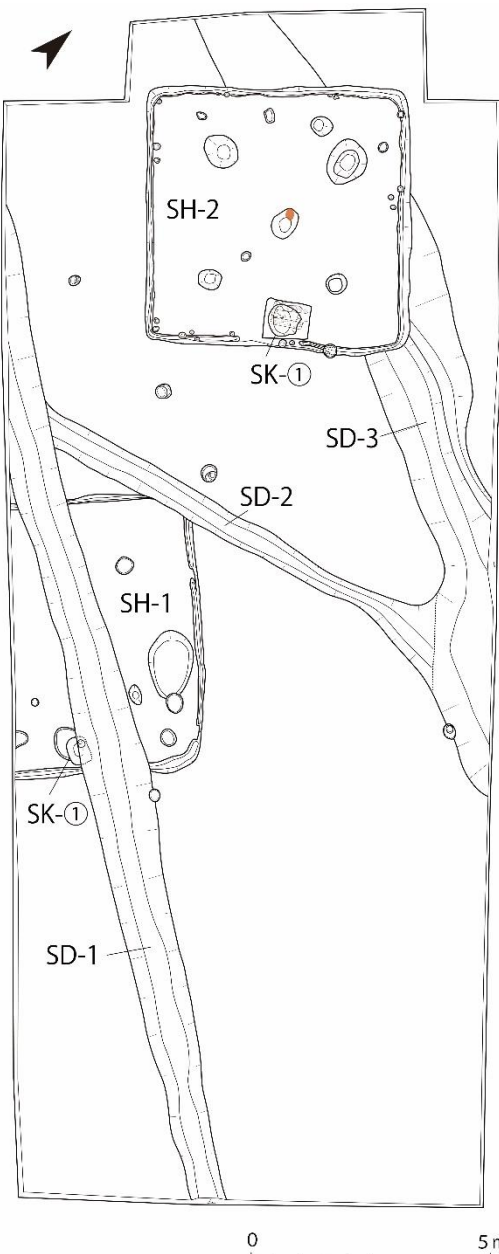
このような重複関係と出土遺物からは、奈良時代に時期比定できるSD-1を除くと、いずれの遺構も古墳時代前期に収まると考えられます。

さて、今回の調査で得た多くの知見の中で、特筆すべきものとして、竪穴建物の貯蔵穴の蓋に使用されていたことがうかがえる板材の出土を挙げたいと思います。

市内では、このような調査例は端緒となりますが、県内をみると、栗東市岩畑遺跡で4世紀後半、東近江市麻生遺跡で5世紀後半の竪穴建物の屋内土坑(貯蔵穴)に板材の蓋が備わっていたことが指摘されています。2例ともに貯蔵穴は建物隅に位置しています。

市内例では、もともと貯蔵穴が備わっていた一辺中央にカマドが配された結果、建物隅に移動することが看取できます。つまり、貯蔵穴の配置から考察すると、今回の検出例は前例の竪穴建物より古相の建物といえます。

一辺中位に貯蔵穴が位置する竪穴建物を弥生時代後期末から古墳時代初頭の琵琶湖南岸地域の地域色とする向きもあります。少なくとも守山市内では、古墳時代前・中期の竪穴建物としては標準的な形態で、今回の出土例はそのことを是認するものです。建物隅に貯蔵穴を配する建物より古相を呈する建物の貯蔵穴にも板材の蓋が備わっていたことを確認できたことは大きな成果と言えます。(沖田)



吉身西遺跡第136次調査検出遺構図

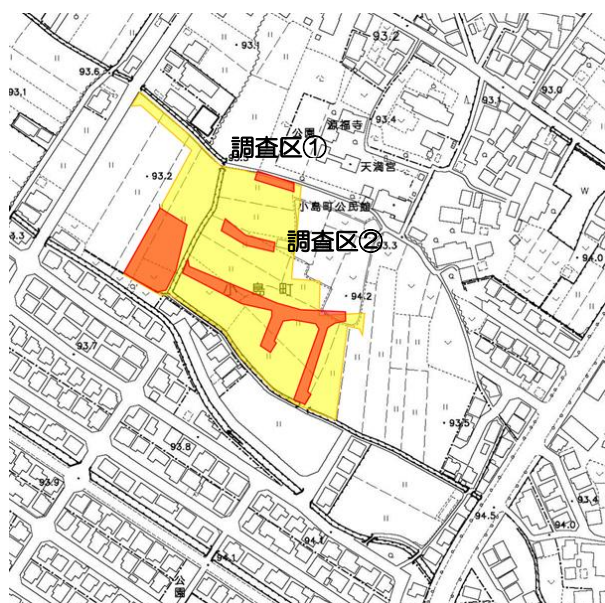
阿比留遺跡第6次調査

阿比留遺跡第6次調査地は小島町字塚生に所在する水田地で、宅地造成工事に先立って6月10日から調査に着手しました。調査の対象地は、宅地内道路と調整池計画地約2,700㎡で、11月末までの予定で調査を進めています。

調査対象地に調査区8区(①～⑧)を設けて順次調査を進めていますが、これまでに①の調査を終え、河道とピットを検出しました。

現在調査中の②では、方形周溝墓、土坑、古墳跡、溝とピットを検出しています。

方形周溝墓は3基検出していて、そのうちの1基からは、甕や壺など、弥生時代中期の土器が出土しています。



調査位置図

また、古墳跡としているのは、周濠跡と考えられる溝状遺構で、ここからは人物、馬形埴輪や円筒埴輪が出土しています。現在のところ、古墳の大部分が調査区外となり、部分的な検出にとどまっているため、5世紀末～6世紀にかけての時期であること以外、墳形や規模などは把握できていません。

現在調査中であるため、詳細については次号以降の本紙紙面でお伝えします。(畑本)



調査区②出の古墳跡から出土した円筒埴輪

トピックス topics トピックス topics トピックス topics トピックス topics

埋蔵文化財センター友の会 第2回見学会を開催しました!

第2回見学会は7月12日(金)に開催しました。

梅雨最中の実施とあって、案の定雨天とはなりましたが、現地に到着した頃には雨脚も弱まり、炎天よりは過ごしやすい中で、葛籠尾崎湖底遺跡資料館、鶏足寺や戸岩寺などの仏像仏画が収納されている長浜市木之本町の己高閣・世代閣、そして北国街道木之本宿の木之本本地蔵院を見学しました。

日程終了後には木之本宿を散策し、湖北文化や往時の北国街道の繁栄ぶりを知ることができました。



葛籠尾崎湖底遺跡資料館見学風景

今回の見学会では、葛籠尾崎湖底遺跡資料館では吉崎さんに、己高閣・世代閣では大山さんに説明していただきました。乙貞紙面からではありますが、お礼申し上げます。ありがとうございました。



己高閣見学風景(左)・北国街道木之本宿散策風景(右)

令和6年度歴史入門講座

「発掘調査からみた古墳時代の情景」第1講・第2講を開催しました！

講座第1講は6月15日（土）、細川修平さん（滋賀県文化財保護課）に「古代王権は琵琶湖をどうみたか」と題し講演していただきました。

琵琶湖辺の要衝を睥睨するように築かれた古墳、玉つくりなどの手工業生産遺跡を具に観察したうえで琵琶湖に抱かれた滋賀県はヤマト王権にとっての一大支持基盤であったとする自身の考えを理路整然と講演していただきました。



初講開催風景

続く第2講は7月20日（土）に開催しました。講師は



第2講講演風景

辻川哲朗さん（〔公財〕滋賀県文化財保護協会）で、「埴輪から見た近江の古墳」をテーマに講演していただきました。埴輪研究では県内第一人者で、専門家ならではの着眼点から埴輪を観察し、埴輪が使われた古墳を通して中央政権と地方との関係性、地域社会の変容などをお話しいただきました。

細川さん、辻川さん、ご講演ありがとうございました。

なお、本年度の歴史入門講座は既に受講定員に達しましたため、申し込みをされた方以外は受講できません。

ご了承いただきますようお願いいたします。（講座資料は受講者以外の方にも配布させていただきますので、希望される方は埋蔵文化財センターまでご連絡ください。）

これまでの乙貞や新着情報は、『歴史のまち守山』や Facebook からご覧いただけます！



◀ 歴史のまち守山はコチラから

<http://moriyama-bunkazai.org>

守山市立埋蔵文化財センターFacebook ページはコチラから▶

<https://www.facebook.com/MaibunMoriyama/?ref=bookmarks>



【後記】首尾一貫というわけではありませんが、ここでも銭貨を取り上げています。およそ四半世紀前、富本銭の発見によって、それまで最古の貨幣であった和同開珎が後塵を拝するとは全く思いもよりませんでした。考古学に限ったことではありませんが、厳然と実年代を傍証する遺物の出土で、歴史的認識はいともたやすく覆るものだと、その当時、痛感したことを思い出しました。

さて、当の和同開珎、鑄造時期では次点に甘んじはしましたが、初の流通貨幣であることは間違いありません。西暦708年、武蔵国秩父郡（現在の埼玉県秩父市）で精錬を必要としない純度の和銅の産出が契機となり、年号は和銅に改元され、和同開珎が鑄造されたとの顛末が知れ渡っていますが、産出のあるなしにかかわらず、唐に倣った貨幣経済への移行計画はすでにでき上っていたようです。律令政府も売買の決済はもとより、商品価値の統一や蓄財を貨幣経済のメリットとして認識していたとされます。

古文書では、和同開珎は律令時代の通貨単位で1文、人1日分の日当に相当する価値で、平城の都に立つ市では米2kgが買えたと伝えていますが、冒頭に記しましたとおり、貨幣経済への移行は思惑通りにはならず、平安時代前期に発行された乾元大宝が最後の銭貨となりました。貨幣の絶対的な流通量不足が敗因の一つに挙げられています。律令政府は、一時のマイナンバーカード取得促進のような様々なプロモーションを展開します。西暦711年（和銅4年）に発布された蓄銭叙位令は、貯金高によって官位がアップするシステムで、貨幣の流通促進とは真逆の政策まで採られ、迷走ぶりがわかります。

2002年といささか古いデータになりますが、滋賀県で出土する皇朝十二銭などの古代銭貨は、当時の都であった奈良県の4,576点に次ぐ2,793点を数えます。この数字、古代の滋賀県では政府の目論見通りに貨幣経済が発達していたとみるべきか、ポイント制度のような蓄銭叙位令に踊らされて、昇進のため蓄財していた小役人が多かったのか、想像はつきません。

（馬耳東風）